
十一番隊湯殿騒動顛末

じょうが あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十一番隊湯殿騒動顛末

【Nコード】

N1396B

【作者名】

じょうが あかり

【あらすじ】

十一番隊の湯殿は何故破壊されたのか！！また、湯殿は元通りになるのか！！剣八、やちる、一角、弓親など、十一番隊中心、ドタバタコメディー！。

十一番隊副隊長草鹿やちるの始末書（前書き）

!!Attention!!

この作品は、BLEACHのファンフィクションです。

尸魂界編終了後のお話です。

かなりバカバカしい作品なので、カッコいい十一番隊を期待されている方は、お気をつけくださいませ。

十一番隊副隊長草鹿やちるの始末書

しまつしよ

十一ばんたい ふくたいちよゝ 草鹿やちる

剣ちゃんをつるりんがおふるこわしちゃいました。ごめんね。う
の花さん、なおしてね。おねがい。

綾瀬川弓親の始末書追加詳細前編

先日起こった湯殿での騒動の顛末の詳細を、僕、十一番隊五席、綾瀬川弓親がここに書き記そうと思う。

事の発端は、僕がいつも通り同隊三席副官補佐の斑目一角を湯殿に誘った事だったのだろう。

「一角、もうそろそろお風呂行かないかい？」

僕がそう声をかけたのは、一角が手合わせの相手を倒した直後だった。

十何席だったか忘れたが（僕は美しくない者の名前まで憶えてられないので）、兎に角、十一番隊上等武闘場の壁に醜く貼付いていた。

「早くねえか？」

いつも通り一角が答えたが、その醜いもの（憶えていない、というか、思い出したくもない）を貼付かせた壁の上部にある窓から差し込む日の光は傾きかけていた。

もうしばらくすると逢魔が時がやってきてしまふ。そうなる前に

湯殿に向かわなければならない。

「早くないよ、もう時刻だし、急がないと最初に入れないよ」

僕がそう急かすと、

「いや、別に一番風呂じゃなくても・・・」

まだ手合わせをしたりしないのか、一角は断わりかけたが、

「一番じゃないと嫌なんだよ！ 隊のみんなが入った後だと、もうなんだかいろんなものが湯舟に浮いてて、そんな中に僕の美しい身体が入ると思っただけでおぞましい、鳥肌がたつよ！」

僕はぴしゃりといい放った。

この僕の言い分に賛同しているのか、それとも僕の美しさに見とれているのか武闘場の中の視線が僕に集中した。殺気らしきものがあるのも、まだ手合わせの最中の者もあるからだろう。

実際、十一番隊の湯殿は衛生面で如何なものかと多々感じずにはられない。

先日、一刻入るのが遅れただけで、体毛やら分泌物らしきもの（よく分析していないので判らない物体）やらが湯舟のあちらこちらに浮遊していた。

はたして彼等は身体をちゃんと洗淨した後、湯舟に入っているのだろうか？

我が隊はちゃんとした教育を受けているのも怪しい連中がいるので、一度、四番隊にでも衛生面の話から入浴の仕方まで指導してもらわなければならないと思う。

もちろん、それが実行されるのなら彼等がきちんと話を聞くように僕も協力を惜しまないつもりだ（必要なら斬魄刀の解放許可も取得しよう）。

「いや、じゃあ取り敢えずお前だけ入ってくればいいんじゃないか？俺は後からゆっくり入るからよ」

一角はあくまで今入ることを拒もうとしたが、僕はそんな事は許さない。

「そんな事言つて、この前入らずに寝ちやつてたじゃないか！」

「別に一日やそこら入らなくたって、死ぬもんじゃねえし・・・」

「絶対、許さない！同室として許さない！そんな奴が隣で寝ていると思うだけでも許せない！」

十一番隊の中には、何日風呂に入っていないのかと思わせる柑橘系な芳香を漂わせている奴も何人かいる、実に由々しき問題の一つだ。

一角とのこんな問答は日々行われており、九割九分九厘、僕が負ける事はない。この時も結局、一角が折れて湯殿に行く事になった。

ここまでの話でも、多々の問題点にお気付きと思う。しかし、本題はこれからになる。

綾瀬川弓親の始末書追加詳細後編

まだ、日は傾きはじめたばかりだ、いつも通りなら十一番隊の湯殿は同隊の末席官が僕の指示通り掃除を行い、終わっている頃合だった。

少なくとも脱衣場はいつも通り綺麗に整頓され、床板の上には髪の毛一筋残っていないかった。

重ね重ねいうが、十一番隊の湯殿は非常に劣悪な環境で、脱衣場などはほおっておくと酒瓶やら鰯などが足下に普通に場所を取っている。

これは人的被害なのだが、僕ひとりでは隊の隅々にまで教育が行き渡らないのが現実だ。（隊の事なので上官へ嘆願すべきかもしれないが、僕より上官となる更木隊長と斑目三席は、このような事柄には我関せずだし、草鹿副隊長はあの通りだからしょうがない。）

衣を脱いで支度をすませると、

「お前、その手拭いの持ち方なんか知らないのかよ？ 女じゃないんだからよ」

一角は、僕が手拭いを胸から前に垂らしているのが気になったらしい。

「一角こそ、前くらい隠したら？」

僕にしてみれば、一角こそ前も隠さず手拭いを肩にかけているだ

けというのはどうかと思う。

「いいんだよ、変に隠すよりこっちの方が漢らしいだろ？」

どうしてそこで男らしさを主張しなければならないのか、僕には理解しがたかった。

確かに一角は格闘家の美しい身体をしている、闘いに必要な筋肉だけついた無駄なものの一切無いその姿は周りに見せびらかしたくなるのも当然だろう、いつだって酒の席には脱いでいるし。

僕だって、変に隠しているつもりはない。

僕の均整のとれた完璧な肢体を見せるのを惜しむ必要もないが、そんな僕の姿を見て一角が変な気を起こさないとмокがらない（なんせ十一番隊は男所帯なので）、ここは、隠しておくべきだろう。

くれぐれも僕は自分の身体に劣等感を感じている訳でもないし、恥ずかしいわけでもない、紳士として当然の行いだ。

「漢らしいの漢は、漢字の漢だ。田んぼに力の男じゃないからな！」

「はいはい」

そんなことはどうでもよかったが、一応本人がこう主張していたので記しておく。

脱衣場から浴室へ行こうと一角が引き戸に手をかけたところで止まった。

「誰かいる」

引き戸近くの籠に確かに何者かの死覇装が無造作に入っていた。

当然だが、末席の連中なら僕より先に湯殿を使った事を死をもつて償わせるところだが、籠の中には白い（ボロボロだが）上等の生地で作られた衣が見えた。

「あれ隊長衣だよ？」

僕が言うが早いか、浴室から声が返ってきた。

「おう、誰かいるのか？」

確かに隊長、十一番隊隊長更木剣八の声だった。

隊長は、隊長の癖に殆ど霊圧を感じることが出来ないらしい、ここに誰かがいることは直感でわかってても、それが誰の霊圧かまではわからない。

「一角です。」

「弓親です。」

「おう、お前らか」

すぐに名を名乗って（そうしなければ隊長にいつ斬られても仕方が無いので）、それから僕らはお互いに顔を見合わせた。

さすがに、僕といえども一番風呂は隊長が入るのが当然だという

事はわかっている。しばらくして出直そうかと思案していると、

「どうした？ 入らねえのか？」

ぐずぐずしていた僕らに隊長が声を掛けてきた。

僕は遠慮しようとしたが、先に一角が

「じゃ、お言葉に甘えて、おじゃまします」

と入ってしまった。

隊長もこういうことに関しては無頓着だし、一角も遠慮がない、まったく僕らの隊の縮図そのものだ。

仕方が無いので僕も一角の後を続く事にした。

「おじゃまします」

湯煙が一瞬視界を奪い、それからうつすらと湯舟につかる隊長の後ろ姿が見えてきた。

一角のそれより更に無駄なものを削ぎ取り筋肉を付けた隊長の背中では、無数の傷が今までの人生を物語るかのように刻み込まれ、これもまた美しい。

いつもの敵を威嚇するような髪型も（僕はあの髪型も僕の思う角度にあわせればとても美しいと思うのだけれど、隊長は決してさわらせてくれない）、今は洗い髪となり、これもまたこれですばらしい。むしろ、こっちの方が隊長には似合うと思う。

と、ここまで認知したのは瞬きの間で、次の瞬間、隊長のさらに向こうに信じられないものを発見した。

「あ、いらっしゃーい。あひるちゃん、お客さんですよー」

「うおっ！」

「きゃっ！」

後続く悲鳴は一角と僕のものだ。

十一番隊副隊長草鹿やちる（幼いが確か女性のはずだ）が、僕らに向かって湯舟から手を振ってきた。副隊長の周りには現世から持ってきたであろうアヒル型の玩具が浮かんでいた。

「お、おおっ、おま、おま、お前っ！ お前、何でこんなところにいるんだっ！」

一角は慌てて前を隠して叫んだ。

僕は最初から隠してあったので、彼ほど慌てなくてすんだ。

もちろん、この場合の一角の言う「お前」とは、副隊長のことだ。

一角はたまに混乱すると、この小さな副隊長の元、上下関係を忘れるらしい、あ、今のは訂正、混乱では無く逆上だ。

一角とは対照的に副隊長はのほほんと、

「え？ お風呂入ってるからに決まってるじゃーん」

小首を傾げてみせた。

「っていうか、むしろ副隊長の方が悲鳴をあげて隠すべきなんじゃないだろうか？」

「一角の論を以てするとこの場合、副隊長の方が僕達よりも漢らしいということになる。」

「『お風呂入ってるからに決まってるじゃーん』っじゃねえっ！
ここは、男湯だあ！」

「だから？」

副隊長は一角をからかっているつもりはない、あくまで一角の言わんとするところがわからないらしい、真剣に。

「一角はお前に女湯に入るべきだって言いてえんだろ？」

「そ、そそ、そうだよ！　そうです、ねえ隊長」

案外、隊長はまともな助け舟を出している。一角もそこにちゃんと乗っかって言及するけれど、

「ええー、やだー！　だっていつもこっちで剣ちゃんと一緒に入ってるもーん」

「は？　いつもなのか？」

「は？ いつも入ってらっしゃるんですか？」

副隊長の切り返しに即座にふたりでツツコミを入れた。

「そうだよー、いつも剣ちゃんと背中洗いつことかしたりするのー、楽しいよー。つるりん達も仲間に入れてあげよっか？」

僕達はふたりともすぐに隊長を振り返った。

「本当ですか？」

「本当ですか？」

「ああ」

涼しい顔で隊長はいつも通り短く答えた。

僕としては、いろいろツツコミたいところも多々あったが、隊長副隊長の関係は恐すぎて明らかにしたくないということもあったので断念した。

「えー、剣ちゃんに言わなくっても本当に仲間にいれてあげるって」

「そこにツツコんだんじゃねえ！ まじムカツク、このどチビ！絶対、おちよくってんだろっ？」

「つるりん、さっきからなんでそんなに怒ってるのー」

「副隊長、一角はべつに怒ってなんかありませんよ。副隊長に裸を

見られたのがちょっと恥ずかしかったので照れ隠ししてるだけです
よ」

「弓親あ！！」

「はいはい一角、キミ、ちょっとおさえてよ」

僕は精一杯、副隊長と三席の間を取り持ったけれど、ここまでだった。確かに僕の力量不足は否めない。

「なーんだ、そんなことか。だいじょぶだよー、剣ちゃんよりちょーっとちっさいけど平気だよ」

「なんのことだ、なんのことなんだあ！！ 殺す、絶対に殺してやる、この破廉恥どチビっ！！」

綾瀬川弓親の嘆願書、及び、虎徹勇音受理報告

と、こんな具合で、後は御想像通りの展開で御覧になった通り湯舟が破壊され、ふたりを止めようとした隊長の手で湯殿の壁が倒壊しました。

が、決して破壊活動を行おうとして、成された結果ではありません。

くわえて、重ね重ねお伝えした、我が隊の湯殿の劣悪な条件から激しく劣化していたものとも思われる事を考慮に入れて、何卒早めの修復の方をお願いした次第です。

我が十一番隊副隊長草鹿やちるの提出した始末書については心よりお詫び申し上げます。

しかし、あれも彼女なりの精一杯であつた事を御理解ください。

衛生面から見ても、四番隊であられる皆様ならご察しの通りいつ死人が出てもおかしくない状況です。

っていうか、僕が周りの汚さで死にそうです。

僕自身は四番隊総合救護詰所で湯を借りさしてはいただいているものの、周りの連中が汚すぎて死にそうです。何卒、早めの修復をお願いします。

これを以て、我が隊の提出した稚拙な始末書のお詫びと詳細の追加、そして嘆願書といたします。

十一番隊第五席 綾瀬川弓親

十一番隊第五席官 綾瀬川弓親殿

先日提出された、始末書の追加詳細と嘆願書受理しました。

しかしながら、希望にそえるには、もう少々時間が必要です。

綾瀬川殿も御存知の通り、先日の旅禍による被害が甚大で復旧作業が思うように進んでおりません。

且つ、次なる敵の刺客がいつ襲ってくるとも限らない為、急務でもあります。

こちらの復旧作業が終わり次第、そちらの修復作業をいたしたいと思っております。

それまで何卒心穏やかにお待ちください。

四番隊副官 虎徹勇音

綾瀬川弓親の嘆願書、及び、虎徹勇音受理報告（後書き）

お目汚し、大変申し訳ございませんでした。

この作品は2005年冬に同人誌発表したものに加筆修正をいたしました。

「こんなん十一番隊じゃな〜い!!」とお怒りの方も申し訳ございません。

私的には、こんなほのぼのな十一番隊もありかな〜と思い描きました。
わらっていただけると幸いなのですが。

また、もし、気に入ってくださったら、別の作品も読んでいただければ幸いです。

じょうがあかり拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1396b/>

十一番隊湯殿騒動顛末

2010年10月8日23時44分発行